

J.S.バッハ(1685-1750)の《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》(全 6 曲)は、3 曲ずつのソナタとパルティータで構成されており、1720 年の日付がある清書譜が残されているため、おそらくそれ以前、バッハの器楽曲の名品が生まれたケーテン宮廷楽長時代前半の所産と考えられている。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 3 番

パルティータ第 3 番には、軽快で明るい印象の舞曲が並ぶ。第 1 楽章プレリュードは華やかに始まり、第 2 楽章ルールでは抒情的な旋律が美しく歌う。第 3 楽章ガヴォット・アン・ロンドーは有名な曲で、単独で奏される機会も多い。第 4 楽章は親しみやすい旋律の第 1 メヌエット、第 5 楽章には柔らかな雰囲気第 2 メヌエットが続く。第 6 楽章は軽やかなブーレ、第 7 楽章はさらに快速なテンポのジグとなり、組曲全体を締めくくる。

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第 2 番

ソナタ第 2 番の第 1 楽章グラヴェは、荘重な旋律が流れるように歌い、フーガを迎える序奏の役割を果たしている。第 2 楽章は、三重音や四重音が用いられ、起伏に富んだスケールの大きいフーガ。バッハの真骨頂とも言える音楽であるが、ここでのフーガは第 1 番に比べてより緻密で洗練されている。第 3 楽章アンダンテは、重音を縫うように進む旋律の美しさに息を呑む。そして第 4 楽章アレグロは、16 分音符の速いパッセージから繰り出される旋律が、エコーのような響きを創り出している。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番

このパルティータ第 2 番の演奏機会が際立って多いのは、ひとえに第 5 楽章に置かれた「シャコンヌ」の魅力による。第 4 楽章までは、伝統的舞曲の定型配置で進み、全体のボリュームとしてはこれらが前半に相当する。そして後半を占めるのが、3 拍子系の古い舞曲を出自とするシャコンヌである。シャコンヌの圧倒的な規模、美しさ、崇高さは、本曲集の真価を象徴しているといっても過言ではないだろう。冒頭で呈示される 8 小節の主題は、4 小節ずつ前後半に分かれて同じ和声進行を繰り返す、その 8 小節の主題がさらに 30 回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた音による建築物ともいえる世界が、一挺のヴァイオリンによって形づくられていく。